

特集にあたって

慶應義塾大学整形外科 中村雅也

脊椎脊髄疾患による筋萎縮は、日常診療で治療する機会が多い症状であるにもかかわらず、神経・筋変性疾患との鑑別や治療のタイミングに苦慮することがしばしばあります。その結果、機能的予後が不良となり、患者さんのQOLを著しく損なうことがあるため注意が必要です。そこで本特集では、整形外科、脳神経外科、神経内科の立場から、筋萎縮をきたすさまざまな病態に対する診断や治療に関して議論することを目的として企画しました。

まず、脊椎脊髄疾患による筋萎縮で頻度が高い頸椎症性筋萎縮症の病態と治療に関しては、整形外科と脳神経外科の各々の立場から今城先生と尾原先生に、また電気生理学的な観点から園生先生にお願いしました。また、病態そのものもすべては解明されていない平山病に関しては、桑原先生にお願いしました。Myotome, dermatome, 筋萎縮のパターン、特徴的な電気生理学的所見など、高位診断や鑑別診断で重要な情報が満載です。

次に鑑別診断として重要な神経・筋疾患による筋萎縮に関しては、青木先生、鈴木先生にお願いしました。青木先生には筋萎縮性側索硬化症をはじめとする運動ニューロン疾患と、また鈴木先生には筋ジストロフィーとの鑑別を中心に記載いただきました。神経変性疾患や筋疾患との鑑別において、整形外科医が見落としがちなpitfallを回避するために重要な知見が数多く記載されています。

最後に筋萎縮をきたす特殊な病態として、首下がり病、サルコペニアと腰痛、脊柱変形（特に後弯変形）を取り上げ、その分野の第一線でご活躍の先生方に記載していただきました。いずれも読み応えがある力作揃いです。

本特集を一読いただければ、脊椎脊髄疾患による筋萎縮に関する情報を網羅的にご理解いただけるものと確信しております。これらの情報が、筋萎縮をきたす疾患の早期診断・早期治療につながり、患者さんの予後改善に寄与することを願っております。